

自立した学習者を育成する教育方法についての一考察

－『学び合い』の授業から考える「個別最適な学び」と「協働的な学び」－

研修課 指導主事 中家 進也

【要旨】 急激に変化するこれからの社会で生きていくためには、自ら学び続ける力と自分とは異なる価値観や考え方をもつ他者と協力的な関係を築き、折り合いをつけながら課題を解決していく力が必要となる。教師が整えた学習環境の中で、こどもが自らの学習を調整し、また他者と協働して学ぶ、自立した学習者を育成する教育方法について考察した。

【キーワード】 自立した学習者、『学び合い』の授業、個別最適な学び、協働的な学び

1 はじめに

（1）求められる資質・能力

令和3年1月、中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」（以下、「答申」と略記）では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のための臨時休業措置が長期に渡って実施される中で、「子供たちは、学校や教師からの指示・発信がないと、『何をして良いか分からず』学びを止めてしまうという実態が見られたことから、これまでの学校教育では、自立した学習者を十分育てられていなかったのではないかと指摘もある。」（※1）と記されている。そして、次代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力として、「文章の意味を正確に理解する読解力、教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力など」（※2）が挙げられている。その上で、「各学校においては、教科等の特質に応じ、地域・学校や児童生徒の実情を踏まえながら、授業の中で『個別最適な学び』の成果を『協働的な学び』に生かし、更にその成果を『個別最適な学び』に還元するなど、『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実し、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要である。」（※3）と述べられている。

（2）「個別最適な学び」

「個別最適な学び」については、「教師が支

援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの『指導の個別化』」（※4）と、「基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する『学習の個性化』」（※5）が必要であると述べられている。そして、「『指導の個別化』と『学習の個性化』を教師視点から整理した概念が『個に応じた指導』であり、この『個に応じた指導』を学習者視点から整理した概念が『個別最適な学び』である。」（※6）とされている。

（3）「協働的な学び」

さらに、「協働的な学び」については、「『個別最適な学び』が『孤立した学び』に陥らないよう、これまでも『日本型学校教育』において重視されてきた、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよ

う、必要な資質・能力を育成する『協働的な学び』を充実することも重要である。」（※7）とされている。

2 実践報告より

（1）『学び合い』の授業

学習指導要領が示す、主体的・対話的で深い学びを実現するために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」をどのように一体的に充実させ、自立した学習者を育てることができるかを、『学び合い』の授業から考えていきたい。

本稿で取り上げる『学び合い』の授業は、西川（2010, 2015）によると、「『学校は、多様な人と折り合いをつけて自らの課題を達成する経験を通して、その有効性を実感し、より多くの人が自分の同僚であることを学ぶ場』であるという学校観、『子どもたちは有能である』という子ども観、『教師の仕事は、目標の設定、評価、環境の整備で、教授（子どもから見れば学習）は子どもに任せるべきだ』という授業観の3つの考え方

（※8）に基づき「一人も見捨てない」（※9）ことを目指した授業である。授業は、初めに教師がその時間の課題の提示を行うと、子どもたちはその時間内に課題を全員が達成するということを意識しながら教室を自由に歩き回り、『学び合い』を行うという形で展開する。

『学び合い』の授業には様々な形態があるが、ここでは筆者が以前、和歌山県教育センター学びの丘で実施した研修講座（注1）において報告した高等学校の地理歴史科における実践から考察していく。

（2）実践報告

実践報告では初めに1時間の授業の流れについて報告を行った。報告内容は以下の通りである。

授業者は、授業の最初の5分間で本時の目標や単元名を伝え、より多くのクラスメイトと積極的に関わり学び合うことが重要であることを確認し、演習問題のワークシートを配付し、『学び合い』を始めるよう指示する。それと同時に授業者はすぐに演習問題の解答を黒板の3か所に掲示し（図1）、解答はいつ確認しても良いことを伝える。

教卓には用語集や史料集、国語辞典等参考となる書物を多く置いておき、生徒に自由に使用するよう声かけをする。

生徒は教室を自由に歩き回ったり、椅子



図1 演習問題の解答

を持って移動したり、机を合わせたりして他の生徒と話し合いながら学習を進めていく。

授業中に授業者が生徒に要求することは、次の4点である。①定められた時間内に全員が理解して演習問題を終える。②そのために自分の席から移動して多くのクラスメイトと積極的に関わり学び合う。③演習問題を終えた生徒は解けていない生徒に積極的に支援を働きかける。④解答を確認したり、教えてもらったりしたときはその解答が教科書のどこにどのような情報として記載されているか必ず確認する。授業者は授業中にこの4点を繰り返し生徒に語りかけ、意識しながら学習に取り組めるように支援する。

授業者は机間指導を行いながら、全体に対して、全員が単元の内容を理解して演習問題を解くことができるよう声をかける。自分一人で問題に取り組んでクラスメイトと学び合うことができていない生徒や、演習問題の内容と関係のない話をしている生徒がいても、その時に個別の指導はせず、最後の振り返りの5分で問いかけを行う。実践した学級では2, 3人でグループをつくり、演習問題に取り組むことが多かった（図2）。



図2 『学び合い』の様子

解答はいつでも確認できるが、ほとんどの生徒は全員一度自分たちの力で解いてから解答を確認する。すぐに解答を確認した生徒も、解答をワークシートに書き写すだけな

く、なぜその解答になるのかを教科書や史料集で確認するなど個々の方法で理解を深めていく。

演習問題が解けた生徒の中には、他の生徒に支援を働きかける前に、今後の学習に生かせるように、教科書にアンダーラインを引いたり、自分のノートに演習問題の内容を整理して書き出したりする者もいる。

教室に設置された時計の位置から真下の延長線上に制限時間を板書し、生徒に時間を意識させながら学習に取り組ませる。実践した授業では1時間に2つの演習問題を設定し、1つの問題の制限時間は20分とした。

黒板の端に各生徒のマグネットシートの名札(図3)を貼っておき、演習問題を解き教科書で確認できた生徒は自分の名札を、解き終わった生徒が貼るスペースに移し、名札を移した生徒はまだ名札が移っていない(演習問題が解けていない)生徒の名前を確認し、その生徒に関わり積極的に支援を働きかける。

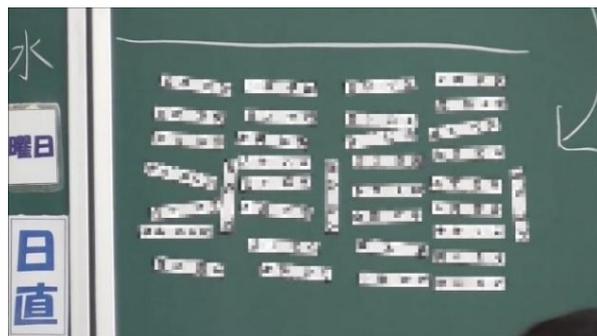


図3 名札

授業終了の5分前には、授業者と生徒が一緒に1時間の振り返りを行う。授業者はクラスの全員が演習問題を理解して解くことができたか、そのために積極的に『学び合い』が行われたかを全体に対して問いかけ省察を促す。これに対し、生徒は静かに個々で本時の学習への取り組みについて省察を行う。その結果、もし積極的な『学び合い』を行うことができなかったと考える生徒には、次回の授業ではどのようにすれば全員がより多くのクラスメイトと関わり、しっかりと学び合うことができるか再考を促す。

以上が授業の流れについての報告である。その後、この『学び合い』の授業に取り組んだ生徒たち(注2)の感想の一部を報告した。次にその内容を示す(図4)。

- ・『学び合い』の授業は、自分たちで学ぼうとする力が向上すると思います。友達と学び合いながら勉強する方が、授業を億劫に感じないと思います。
- ・『学び合い』の授業は、自分たちで答えを探し出す力を身に付けることができると思います。
- ・『学び合い』の授業は、自分のペースで学べるから良いです。
- ・友達に教えたり教えてもらったりして頭に残りやすいし、分かるようになってきて点数が上がったので、これからも続けていってほしいです。
- ・自分自身で大切なところを見つけながら学ぶことができ、分からないところがあればクラスメイトに聞くことができるから良いです。
- ・授業中にじっくりと教科書や史料集を読む時間ができ、以前よりしっかりと教科書や史料集を読み込むようになりました。
- ・少しですが成績が上がりました。授業中に話を聞いてすぐ理解するといったことはできないので、プリントで要点をまとめてくれた方がとっても分かりやすいと感じるようになってきました。何より楽しいです。
- ・自分たちが主体になって授業を行っているので楽しいです。

図4 『学び合い』の授業の感想

3 考察

(1) 『学び合い』の授業の効果

先の(2)は、1時間の『学び合い』の授業の一例であり、前述したとおり、子どもたちは有能であることを前提に、教師が教えるのではなく、学習環境を整え、学びをこど

もに委ねる授業である。

『学び合い』の授業において、子どもたちの対話と協働により進んでいく場面については、実践報告にあったように授業中により多くのクラスメイトと関わり、自身が理解（インプット）したことを他者に教える（アウトプット）ことにより、より自身の理解が深まるという効果があると考えられる。

また生徒の感想の中には、「自分のペースで学べるから良い」「教えたり教えてもらったりして頭に残りやすい」「分からないところがあればクラスメイトに聞くことができるから良い」などの記述があり、他者に教えるだけではなく、子どもが自ら学習を調整する自立した学びにもつながっている。

さらに、テキストや端末で検索した文章を読み解き理解したことを互いに分かりやすく伝えるという活動は、「答申」が目指す資質・能力の、文章の意味を正確に理解する読解力の育成につながると考える。これについては、生徒の感想の中に、「自分たちで学ぼうとする力が向上する」「自分たちで答えを探し出す力を身に付けることができる」「しっかりと教科書や史料集を読み込むようになった」などの記述があることから実感することができる。

（2）『学び合い』の授業における「個別最適な学び」

それでは、協働学習としてのイメージの強い『学び合い』の授業における、「個別最適な学び」についてはどうだろうか。実践報告では、授業中に授業者は『学び合い』を促す声かけを行い、積極的な移動やクラスメイトとの関わりを要求し、授業の最後には『学び合い』が十分に行われたかどうかを振り返り、そうでなかったとすれば再考を促すとあるが、そうではなく、その時間内に『学び合い』をせずに個別学習を選択することも可能であり、個別に学びたい子どもは個別学習という学び方を選択しても良いと考える。実際、生徒の感想の中にも「自分のペースで学べるから良い」といった記述がある。西川（2017, 2015）は「実際、『学び合い』の授業を詳細に記録分析すれば、『学び合い』の時間のほとんどは、子どもたちは一人で考え作業をしています。」（※10）と述べ、「自分一人で勉強した方がわかるならば、一人で勉強してもいい」（※11）と個別学習を認めることの必要性を述べている。個別学習を選択したい子どもにはそれを認めた上で、子ども

がいつでも周囲と学び合える学習環境を教師が整えてさえいれば、その個別学習は「孤立した学び」に陥ることはなく、『学び合い』の考え方を子どもが理解することで、探究的な学習を通じて協働的な学びを行う土台となると考える。伏木（2023）は、「個別学習を通して、自分なりの追究を経験し、自分の考えを話す準備ができている子ども同士が学び合うことで、対話の質が深くなると考えられる。また、一人ひとりの個性的な学びが『学び合い』によって交流し合い、それぞれの気づきや考え方を客観視できる場におかれることで、個の学びに帰っていく際の新たな視点を獲得する機会ともなる」（※12）と述べている。

また、最初に解答を示し、いつでも解答を確認することができるようにすることで、解答をゴールとする学び方や、解答を確認することからスタートしテキストに戻る学び方、1問解くごとに解答を確認しながら進めていく学び方など、子どもは個に応じた様々な学び方を選択することができる。

学習材についても史料集等、様々な参考文献等をいつでも自由に活用できるようにすることで、子どもは自分にあった方法で学ぶことができる。報告当時には1人1台端末が整備されていなかったが、現在は、端末を使った検索や学習動画の視聴などを含め、子どもは様々な学習ツールを選択することが可能である。特にICTの活用については、活用することが目的となつてはいけませんが、効果的に活用することにより、「答申」が目指す資質・能力の育成につながると考える。これについて奈須（2021）は、「学習環境を整えるに当たっては、子どもが潜在的、顕在的に求める多様な学びの機会を柔軟に提供することが望まれる」（※13）とし、「いろいろなものを子どもたちに開放し、子どもたちの都合やタイミングで自由に使ってよいことにする方が、長い目で見れば得策」（※14）であると述べている。

演習問題や制限時間についても、実践報告では同じ時間に2つの全員共通の演習問題に取り組みさせていたが、取り組み順番を選択させたり、制限時間を弾力的に子どもに委ねたりすること等の工夫もできる。こういった工夫により、「指導の個別化」と「学習の個性化」を充実させ、『学び合い』の授業の中で「個別最適な学び」を促進することができる。と考える。

（3）「個別最適な学び」と「協働的な学び」の土台となる『学び合い』の授業

以上の考察から、授業者が、授業の最初の5分間で、前述した、授業者がこどもに要求することの4点に加え、個別に学びたいこどもは個別学習を選択しても良いこと、そして個別に学んで理解したことはその後クラスメイトに積極的に伝えることが重要であることを確認する。そうすることで、『学び合い』の授業は「個別最適な学び」と探究的な学習等を通じた「協働的な学び」のしっかりとした土台となり、一体的な充実の基礎になると考える。

最後に、この『学び合い』の授業についての実践報告を聞いた、研修講座の受講者の感想の一部を以下に示しておく（図5）。

- ・『学び合い』の授業をする方が講義型の授業より難しいというのは、私も思います。生徒にどういふ声かけをするのか、理解を深めるための問題提起はどんなものがよいのか難しいと思いました。
- ・世界史や日本史の授業において教師が一方的に講義するのではなく、生徒が自身の問題として捉えられるように、いかに興味・関心をもたせるかというところを改善していきたいと思いました。
- ・インプットだけでなくアウトプットをさせることもしていかなければならないと学ぶことができました。教員の準備が非常に大切で、生徒が学ぶ環境を整えていないといけないと感じました。
- ・『学び合い』の授業の課題の出し方にはいろいろな手法があると思うので、その参考とすることができました。
- ・可能な限り『学び合い』の授業のような生徒主体の授業をつくらせたいと思いました。また、講義型の一斉指導の中でも知識のアウトプットを多く取り入れた授業をつくるよう心掛けたいと思います。

図5 実践報告を聞いた受講者の感想

4 終わりに

奈須（2021）は、「子どもは学ぼうとしているし、学ぶ力をもっています。すべての子どもは適切な環境と出会いさえすれば、自ら進んで環境に関わり、その相互作用の中で自ら学びを進め、深めていく存在なのです。このように考えるとき、教師の仕事としては、直接的に教えるという従来のあり方に加え、学習環境を整えることにより間接的に学びを促し支援するというもう一つのあり方が見えてくるでしょう。」（※15）とし、「今や学校学習は、教師による情報の伝達を基本的な作業とするあり方から、子どもたちによる意味の創出を中心的な主題とするあり方へと、その姿を大きく変えようとしています。」（※16）と述べている。

『学び合い』の授業は教師が環境を整え、学びをこどもに委ねるといふ、こどもが主語（主体）の授業であり、こどもを自立した学習者として育む手段として有効な教育方法であると考えられる。生徒の感想にも「自分たちが主体の授業なので楽しい」といった記述もある。自立した学習者を育成するために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、その1つとして、教師が環境を整えることも必要不可欠であると考えられる。

<注釈>

- 注1 令和3年度社会科・地理歴史科・公民科教育研修講座における実践報告。
- 注2 この学級は前年度まで、筆者の講義形式の一斉授業を受けており、この年度は他の教科では一斉授業を受けている。

<引用文献>

- ※1 中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』p.13（2010）
- ※2 中央教育審議会「前掲（答申）」p.3（2010）
- ※3 中央教育審議会「前掲（答申）」p.19（2010）
- ※4 中央教育審議会「前掲（答申）」p.17（2010）
- ※5 中央教育審議会「前掲（答申）」p.17（2010）
- ※6 中央教育審議会「前掲（答申）」p.18（2010）
- ※7 中央教育審議会「前掲（答申）」p.18（2010）
- ※8 西川純『『学び合い』スタートブック』東洋館出版社 p.42（2010）
- ※9 西川純『『学び合い』を成功させる教師の言葉かけ』東洋館出版社 p.2（2015）
- ※10 西川純『私は『学び合い』をこれで失敗し、これで乗り越えました。』東洋館出版社 p.12（2017）
- ※11 西川純「前掲書※9」p.37（2015）

- ※12 奈須正裕・伏木久始『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して』北大路書房 p. 99 (2023)
- ※13 奈須正裕『個別最適な学びと協働的な学び』東洋館出版社 p. 187 (2021)
- ※14 奈須正裕「前掲書」p. 190 (2021)
- ※15 奈須正裕「前掲書」p. 187 (2021)
- ※16 奈須正裕「前掲書」p. 245 (2021)

<参考文献>

- ・赤澤佑輔，西川純『『学び合い』における目標設定に関する事例的研究』上越教育大学教職大学院研究紀要第8巻(2021)
- ・上野佳奈恵，西川純『『学び合い』授業における学習者の変容についての事例的研究』上越教育大学教職大学院研究紀要第7巻(2020)
- ・奈須正裕『個別最適な学びの足場を組む』教育開発研究所(2022)
- ・西川純『『学び合い』はしない1段上の『学び合い』活用法』明治図書(2022)
- ・V I E W21中学版 2011 Vo 1.3『特集 学び合いークラス全員が学びに参加する授業ー』ベネッセコーポレーション(2011)